

研究通信

No. 21

村落研究会
事務局

区学内
市社会
市大研
大研

本年度大会を顧みて

(東京) 小池基之

本年度の大会は、昨年度の大会の課題を一層発展させし深化させるという意味で、同じ問題をまた共通課題としたわけであつたが、その結果は、昨年度の大会において残された問題の追求・説明に充分な成果があげられたとは、かならずしもいいがたいように思われる。それは、まず第一に、共同討議における私の「司会」の不手際による米すものといわねばならないが、その「不手際」は、共通課題「農家人口の変動と家族の構造」のなかで、とくに「家族の構造」に連なる面にお討議を充分に尽くすべき分野があつたように思われる。にもかかわらず、「社会学的な」側面からの問題提起を分析的な仕方でも展開し整理するための準備を欠いていたという、私自身の不勉強にもとづくものであつたことを、ここで改めて反省している。次ぎにある。懇談会席上における内山氏及びその他の方々によつてなされた、大会の「経済学的偏向」という批判的発言も、肯かされる根拠は充分にあつたのである。

「人口の影響を家族構造において見出すのに充分でなかつた」という批判は、「研究通信」第十八号大阪大会特稿所載の有賀先生の「知識を全体のものに」のなかにも指摘されているところである。日本の村が家族を構成の単位としており、家族が同時に生産の単位となつていくところからしても、家族の問題はいろいろの側面から追求されなければならないのは当然であるけれども、私達の側

面からは、どうしても経済学的側面にたよつて問題を処理していくということになり勝である。家族なら家族という一つの「対象」を徹底的に説明しようとする場合、ここまでは経済学者の分野でこのままでは社会学者の分野というような区分はない昔で、各方面の専門的な側面からの追求が相互に相補いあい深めあつていくところだ、この村落社会研究会の特色があるのだと思うし、大会の共同討議は共通の問題点をあきらかにする「場」であると同時に、同じ「対象」へのいろいろの接近の仕方への補充・綜合の「場」であるべきだと思ふのである。そして、そういうものとして、村落社会研究会の「共同討議」も、また獨特の風格と勇躍をもつて「懇談会」もあるのだと思うのである。

家族の問題は「集落」の問題につながりを持ち、また「集落」のなかで、いろいろな在り方をうけてつていく。一方ではいま農政の中心。乃至は単位として「集落」が改めて問題とされてきている所柄、「集落」を共通課題としてとりあげることも、本年度のこされた問題を一層発展させる一つの方向ではないかと考えられる。「集落」の問題はすでに充分とありあげられた問題であるかもしれないがなお具体的に究明するべき点が多いのではなからうか。「集落」の諸規程のなかで家族構造はどういう規定をうけるのだからかといつた問題は、昨年度大会の共同討議における井森氏の発言に關聯をもつてくるであらうし、また家族構造の変化が「集落」の形態に變化を及ぼしてくる面もあるであらう。「集落」の発展・解体およびそこに見られる段階的諸類型が明らかになれば、それに作用する諸フアクタの分析から、「農家人口の変動と家族の構造」にも、連つた光があてられるのではないだろうか。本年度大会の結果から、莫然と、いまわめて莫然と一こんなことを考えてみるのだが、いずれにせよ、来年度の大会では、過日の懇談会席上での要望が充分にいれられて、そして私自身としては本年度の大会における自分自身の不勉強をとりかえす意味をも含めて、どのよう問題が發展していくかを、いまから楽しみにし、かつ大いに期待をかけているものである。